

## 広島大学蔵刊本『源氏物語抄(紹巴抄)』とその書き入れについて

妹尾好信

【キーワード】源氏物語・紹巴抄・細流抄・願正寺

### はじめに

いわゆる『源氏物語紹巴抄』は、連歌師の里村紹巴が、三条西公条による『源氏物語』講釈を聞書したもので、永禄八年(一五六五)春頃の成立と考えられている。『源氏物語』五十四帖すべてに注釈を施し、巻頭に序文と総説を置いた大部にして完備した注釈書で、『源氏物語』注釈史の中でも重要なもののひとつである。写本で伝わるほか、近世初期の寛永年間(一六二四～四四)頃に古活字本で刊行され、後に製版本に覆刻されて、刊本として世に流布したことも知られている。

広島平安文学研究会が発行している「翻平安文学資料稿」の第二期には、稻賀敬二先生によって御架蔵の写本二十冊が『永禄奥書 源氏物語紹巴抄』として十分冊で刊行されている(昭和51年～61年刊、平成7年に索引編刊)。『源氏物語』古注釈書の翻刻刊行が盛んになって久しいが、『紹巴抄』に関しては目下、活字化された出版物は

「資料稿」のみである(中野幸一氏編「源氏物語古註釈叢刊」の一冊として近く刊行予定の由であるが、今のところ未刊である)。「資料稿」では、各冊の巻末に「刊本との項目異同」の欄を設け、刊本と校合して大きな異同を一覧している。その際に用いられたのは、広島大学文学部国語学国文学研究室所蔵の二十冊の製版本である。

このたび、日本学術振興会の科学研究費補助金の交付を受けて、『源氏物語』古注釈資料本文のデータベース化を試みることにになり、サンプルとして刊本『源氏物語紹巴抄』を取り上げることにした。刊本の翻刻本文と画像データ、そして「資料稿」に翻刻された写本文の版面とを相互に参照できるようにしたいと考えている。底本には「資料稿」で校合に用いた広島大学蔵の刊本を採用することにしたが、同本には、各冊の見返しに旧蔵者による書き入れがあり、また第一冊目には行間や欄外に多数の注釈の書き入れが存する。本稿では、広島大学本の書誌を紹介するとともに、第一冊目の書き入れ注を翻刻し、それがいかなる注釈であるかについて考察する。

一 『紹巴抄』諸本の概観

『紹巴抄』は、外題や内題に『源氏物語抄』とある伝本が多く、正式な書名は『源氏物語抄』とみなされるが、同名他書と区別するために『源氏物語紹巴抄』略して『紹巴抄』と呼ばれることが多い。ただし、諸伝本にはさまざまな異称が付されている。

『国書総目録』(補訂版)には、書名と諸伝本が次のように記されている。

◎源氏物語抄 二〇卷二〇冊 ①源氏抄・源氏二十卷抄・源氏物語称名院抄・源流臨江抄・源氏物語紹巴抄・水源紫明抄 ②注釈 ③里村紹巴 ④永禄六頃 ⑤国会(「水原紫明抄」)・京大(国会蔵本写)(一五冊)(二〇冊)・実践・東大・山口(二〇冊)・神宮・天理(第五冊欠、九冊)(二〇冊本二部)・桃園・無窮神習(一冊)・竜門(文禄四写) ⑥寛永古活字版—東洋<sup>岩崎</sup>・蓬左・大東急・高木、古活字覆刻版—内閣・京大・大阪府・蓬左・天理・穂久邇(卷一欠)・竜門、刊年不明—国会・宮書・九大・東大・高知・日比谷加賀・穂久邇

このように、六種の異称と、写本十四点、版本三種十八点の伝本が掲げられている。また、同書「補遺」には、

源氏物語抄(里村紹巴) ⑦天理吉田(「源氏物語桐壺抄」、室町末期写一冊) ⑧古活字覆刻版—島原(「紫糸抄」)

とあって、写本・版本各一点が追加されている。

さらに、『国書総目録』の続編である『古典籍総合目録』には、

源氏物語抄 二〇卷二〇冊 ①源氏抄・源氏二十卷抄・源氏物語称名院抄・源氏臨江抄・紹巴抄・源氏物語紹巴抄・水源紫明抄 ②注釈 ③紹巴(里村紹巴) ④永禄六頃 ⑤国文研<sup>初雁</sup>(「紹巴抄」、昭和三—四西下経一・入江悦子・倉田道子・國友喜一郎・中村辰雄写二〇冊東京帝大蔵本の写) ⑥太宰府天満宮(「源流臨江抄」、二〇卷 寛文刊二〇冊 古活字本覆版)

とあって、新写本一点と版本一点が記される。

これらによれば、『紹巴抄』の伝本には約十五点の写本と三種類二十点ほどの版本があることになる。三種の版本とは、古活字本とその覆刻版、そして刊年不明の製版本である。古活字本については、川瀬一馬氏著『増補古活字版の研究』(昭42)に、

源氏物語紹巴抄 里村紹巴撰 二十卷 二十冊

活字印本盛行期に於ける源氏物語注釈書の刻本として最も大部なものである。寛永十七年刊左大将六百番歌合等と同種の小型活字印本で、寛永後期の開版と認められる。卷末に、天正八年仲夏上旬三條西殿等の聞書を武州忍成田総州の懇望に拠って許可する由の紹巴の識語を附刻してある。《十行平仮名交り、每行約二十四字。字面の高さ、約六寸六分。》

伝本の管見に入つたものは、東洋文庫・安田文庫・久原文庫・高本文庫《書人多し》蔵の四本に過ぎず、世に流伝するものは、寛永末年頃に本書に片仮名附訓を施して覆刻した製版本《内閣

文庫(和学講談所旧蔵二十冊)・京都帝国大学(十冊)・大阪府立図書館(二十冊)・蓬左文庫・高木文庫(真如蔵旧蔵、二十冊)・奈良女高師(二十冊)等あり。《である。原本を極めて精刻してある部分が多いので、間々活字印本と誤認せられてゐる。

という記述がある(《内は二行割書》。これによると、古活字本の刊行は寛永後期と認められること、巻末に紹巴の識語が付刻されていること、寛永末年頃に付訓を施した覆刻製版本が刊行されて世間に流布したことが知られる。そして、古活字本に『国書総目録』に載らない安田文庫と久原文庫蔵の二本の伝存があることが記され(安田文庫蔵本は第一冊巻頭第一丁の写真が示されている)、製版本についても奈良女高師蔵本の存在が知られる。

古活字本の巻末にある紹巴の識語というのは、第二十冊末尾の後見返し部分に、

此二十冊者 三条西殿

右府入道殿公條公 稱名院殿 御講

釈 予 聞書也 武州忍成田総州依御懇

望奉許可畢

可被守御在名而已

于時天正八年仲夏上旬 紹巴判

とあるのをさしている。製版本にはこの識語はない。藤田徳太郎氏『源氏物語研究書目要覧』(昭和7 六文館)が本書を「天正八年成」とするのは、この識語によつたものであろう。

川瀬氏によれば、『紹巴抄』の版本は、寛永後期刊の古活字本と寛永末年頃に付訓を施した覆刻製版本との二種ということになり、『国書総目録』のように「寛永古活字版」「古活字覆刻版」「刊年不明」の三種に分類する立場はとっておられないようである。池田亀鑑氏編『源氏物語事典』下巻所収の「注釈書解題」(大津有一氏執筆)にも、「刊本としては十行古活字本と十一行製版本が残っていて」云々とあり、川瀬氏と同様古活字本と製版本の二種に分類されている。ところが、近年刊行の伊井春樹氏『源氏物語注釈書・享受史事典』(平成13 東京堂出版)には「版本には寛永古活字版・同覆刻版・無刊記版が存する」とあって、『国書総目録』と同様三分類をとっている。

詳しい調査をしたわけではないので確かなことは言えないが、『国書総目録』が「古活字覆刻版」として載せる内閣文庫本と「刊年不明」として載せる国会図書館本とを実見して比べた限りでは両者の版面に目立つた相違はなく、いずれも広島大学本と同一の版と思われる(ただし、後述のごとく各冊冒頭の目録の刷り位置に相違がある)。

国文学研究資料館のマイクロ資料目録によると、平成十五年八月現在、次の五点がマイクロフィルムとして収集されている。うち四点が刊本である。

東洋文庫蔵本(三A d 一三三) 刊 二〇冊

神宮文庫蔵本(一六二三三) 写 二〇冊

熊本大学国文研究室蔵本(九一三・三六・Ma八二) 刊 七冊

陽明文庫蔵本 刊 二〇冊

上田市立図書館花春文庫蔵本(五) 刊 二〇冊

マイクロフィルムで見たところ、刊本四点のうち、東洋文庫本と

陽明文庫本は付訓や返り点・送り仮名などのない十行本で、古活字本と認められる(ただし、陽明文庫本の第二冊は補写)。他は広島大学本と同じ十一行製版本である。熊本大学本のみ七冊本であるが、これは二十冊本の三冊ないし二冊を合冊して七冊としたものである。

十一行製版本は、管見の及んだ限りどれも同一版と思われるが、各冊冒頭一丁に置かれた巻名目録の刷り位置に違いが見られる。と言うのは、広島大学蔵本は、全冊とも本文の前の丁の表面、つまり扉の位置に目録が置かれているのであるが、これとは別に、袋綴じの裏面に刷られて表紙に貼られ、見返しの位置に目録を記すものを一部に含む伝本が存するのである。たとえば、国会図書館本や上田市立図書館本は、二十冊のうち第五冊から第十六冊までの十二冊がこの見返し目録型になっている。また、熊本大学本は前述の通り合冊された七冊本であるが、もとの二十冊の冒頭のうち、第二、四、七、十、二十冊の十四冊分が見返し目録型である。第四、第七、第十、第十三、第十六、第十八冊は第二冊目以降の冒頭にあたるので表紙に貼られて見返しになっているが、他は本文の途中に挟まれた形になっている。これに対して内閣文庫本などは広島大学本と同じく全冊扉型である。どちらが本来の形であるかはわからないが、全冊扉型の方が統一がとれていてすっきりしていることは間違いない。

## 二 古活字本と製版本との相違

どうやら、『紹巴抄』の刊本諸本は、十行古活字本と十一行製版本の二つに分けるのが妥当で、「寛永古活字本」「古活字覆刻版」「刊年不明」本の三つに分ける『国書総目録』の分類はやや無理があるように思われる。十一行製版本は十行古活字本を覆刻(かぶせ彫り)して作られたもので、その意味ではすべて「古活字覆刻版」である。また、古活字本を含めて刊記のある刊本はないから、すべて「刊年不明」本である。

川瀬氏が言われるように、製版本は「原本を極めて精刻してある部分が多いので、間々活字印本と誤認せられてゐる」というほど精巧な覆刻であるが、古活字本にない漢字の付訓や仮名の清濁符号、漢文表記部分の返り点・送り仮名が付されて全体的に読みやすいように手を加えられているのが特色である。第一冊目を見る限り、十行古活字本と十一行製版本との間に注釈項目の削除や追加などの出入りはない。項目に関する異同はほとんどが仮名の清濁表記の有無である。次に一覧する。

《十行古活字本》

《十一行製版本》

さうし

さうじ(10オ)

すげなふ

すげなふ(12ウ)

たいたいしき

たいだいしき(19オ)

さへ

ざへ(21オ)

けさく	げさく(21ウ)
三たい	三だい(22オ)
うけはりて	うけはりて(22ウ)
くはんさ	くはんさ(24ウ)
きひは	きひは(25ウ)
あけおとり	あけおとり(25ウ)
けしきはみ	けしきはみ(26オ)
とむ食	どむ食(28オ)
しけいさ	しげいさ(28ウ)〈以上桐壺巻〉
ゆへつけて	ゆへづけて(34オ)
みみた、すかし	みみた、ずかし(35オ)
又なを人のかんだちめにて	又なを人のかんだちめ(35オ)
大やけはらた、しく	大やけはらだ、しく(39ウ)
えんすへき	えんずべき(42ウ)
ひひらきあたり	ひびらきあたり(44オ)
さうしみはなし	さうじみはなし(49オ)
をたしく	をだしく(54オ)
さうしら	さうじら(57オ)
あへかり	あべかり(59オ)
けとをき	けどをき(63オ)
あはめらる、	あばめらる、(64ウ)
さは	さば(67ウ)

さはれ

さばれ(69ウ)〈以上箒木巻〉

また、古活字本では誤って項目の頭を一字下げて記し、注釈部分に埋没してしまっている個所がいくつかあるが、製版本では一字上げて位置を修正している。第一冊では、箒木巻の次の二例である。

にこりにしめる(製版本42オ)

りんし(製版本44ウ)

この両者は、製版本の版面を古活字本と比べると、「に」「りん」が不自然に縦長に彫られていて、行頭を一字分上げるためにやや無理をした形跡が窺われる。

ただし、製版本でも位置が正されず、一字下げになったままの例も一例ある。やはり箒木巻の次の項目である。

きこえさせつる(製版本46ウ)

これは製版本作成にあたって項目の位置の誤りを見落したか、または修正し忘れたかであろう。

他に、古活字本の項目表記の誤りまたは不備を製版本で正した例もある。第一冊目では次の二例である。

《十行古活字本》

《十一行製版本》

御さうそく一くた

御さうそく一くたり(桐壺・15ウ)

人みなく

人なみく(箒木・47ウ)

是にたえす

是にたらず(箒木・59ウ)

もちろんこれらの修正は項目だけではなく注釈本文にも及んでいよう。これを見ても、古活字本から製版本への覆刻は、単なる精巧

な覆刻ではなく、注釈本文を読みやすくするとともに、古活字本の不備を努めて修正しようとする姿勢がはっきり見て取れるのである。

それにしても、一面十行本を十二行本に改めたのは丁数を減らして本の値段を安くするためかと思われるが、一行ずつ前の面に送って版木に貼り付けて彫っていったのだとすると、その労力は相当なもので、はたしてコストが割にあつたのだろうかと心配になる。ただ、版面を見ても貼り合わせて作ったような形跡は全く見られず、大した技術だと感心する。全二十冊の巻配置と巻頭の目録1丁を除く両本の丁数の相違を次に一覧する(巻名表記は原本のまま)。巻の配置は古活字本も製版本も全く一致する。矢印の上が十行古活字本、下が十一行製版本の丁数である。古活字本の調査は東洋文庫本のマイクロフィルムによつた。「半」とあるのは、最終丁が表面で終わり、裏表紙にはりつけられて後見返しになっているものである。

《古活》 《製版》

第1冊	桐壺・は、き、	76丁	↓	69丁
第2冊	うつせみ・夕かほ	39丁半	↓	36丁
第3冊	若むらさき・すゑつむ花	50丁半	↓	47丁
第4冊	もみちの賀・花のえん・あふひ	60丁半	↓	55丁
第5冊	さかき・花ちる里・すま	60丁半	↓	55丁
第6冊	あかし・みおつくし・よもぎふ・関屋	61丁	↓	55丁
第7冊	絵合・松かせ・うす雲	51丁半	↓	47丁
第8冊	朝かほ・おとめ	58丁	↓	52丁

第9冊	玉かつら・初子・こてふ・ほたる	84丁半	↓	77丁
第10冊	とこなつ・か、り火・野分・御ゆき・藤はかま・真木柱	95丁半	↓	85丁

第11冊	梅かえ・藤のうら葉	36丁	↓	34丁
第12冊	わかかな上	65丁	↓	60丁
第13冊	わかかな下	55丁半	↓	51丁
第14冊	かしは木・よこ笛・す、むし	48丁半	↓	44丁
第15冊	夕霧・御法	57丁	↓	52丁
第16冊	まほろし・匂ふ宮・紅梅・竹川	67丁半	↓	61丁
第17冊	はし姫・椎かもと・あけまき	87丁	↓	79丁
第18冊	さわらひ・やとり木	58丁	↓	54丁
第19丁	あつま屋・うき船	61丁	↓	56丁
第20丁	かけろふ・手ならひ・夢のうき橋	63丁	↓	58丁

三 『紹巴抄』刊本の伝本一覧

ここで、前掲の『国書総目録』と『古典籍総合目録』の記載に、『源氏物語事典』『注釈書解題』、『源氏物語注釈書・享受史事典』、『増補古活字版の研究』、さらに国文学研究資料館所蔵マイクロ資料目録などの情報を加えて、現在知られている『紹巴抄』刊本の諸伝本を古活字本と製版本の二種に区分して一覧しておく。各文庫・図書館の目録からも情報を補った。ここでは写本については省略し、刊本のみに限って掲げた。

## ○古活字本

- 1 東洋文庫蔵本岩崎(二十冊。外題「源氏物語抄」)
  - 2 大東急記念文庫蔵本(二十冊。後補題簽「源氏物語紹巴抄」。  
第六冊あたりまで書き入れあり。)
  - 3 高木文庫蔵本(二十冊。書き入れ多し)
  - 4 安田文庫蔵本(二十冊。)
  - 5 久原文庫蔵本(二十冊。)
  - 6 陽明文庫蔵本(二十冊。第二冊は補写)
- 覆刻製版本
- 7 内閣文庫蔵本(二十冊。外題「源氏物語抄」。書籍館・浅草文庫・和学講談所旧蔵本)
  - 8 京都大学蔵本(十冊)
  - 9 大阪府立図書館蔵本(二十冊。内題「源氏物語抄」。目録に「寛永年間印行の古活字本を覆刻した無刊記製版本(覆古活字本)」とある)
  - 10 蓬左文庫蔵本(二十冊。外題「源流臨江抄」。目録には「寛永年間刊(古活字本覆刻)」とある。「国書総目録」には寛永古活字本と古活字本覆刻の双方所蔵とあるが、目録には本書だけしか見えない)
  - 11 天理図書館蔵本
  - 12 穂久邇文庫蔵A本(十九冊、卷一欠)
  - 13 穂久邇文庫蔵B本

## 14 竜門文庫蔵本

- 15 島原図書館松平文庫蔵本(二十冊。外題「紫糸抄」。目録には「古活字十一行二十一字」とあるが製版本であろう)
  - 16 太宰府天満宮蔵本(二十冊。外題「源流臨江抄」。目録には、寛文頃刊「古活字覆版」とあり)
  - 17 高木文庫蔵本(二十冊。真如蔵旧蔵本)
  - 18 奈良女子大学蔵本(二十冊)
  - 19 国立国会図書館蔵本(二十冊。外題「源氏物語抄」)
  - 20 宮内庁書陵部蔵鷹司本(二十冊。外題「源氏二十巻抄」)
  - 21 九州大学蔵本
  - 22 東京大学蔵本(二十冊。外題「源氏物語抄」)
  - 23 高知県立図書館蔵本
  - 24 東京都立中央図書館加賀文庫蔵本(二十冊。外題「源氏二十巻抄」)
  - 25 熊本大学国文学研究室蔵本(七冊)
  - 26 上田市立図書館春花文庫蔵本(二十冊。外題「源氏物語抄」)
  - 27 桃園文庫蔵本(二十冊。外題「源氏物語抄」。朱書き入れあり)
  - 28 広島大学蔵本(二十冊。外題なし。第一冊目に書き入れ多し)
- 四 広島大学蔵刊本の書誌と見返し書き入れ
- 改めて、広島大学蔵刊本『源氏物語抄(紹巴抄)』の書誌を記す。  
広島大学附属図書館中央図書館蔵。大本。縦二七・七センチ×横

二〇・三センチ。楮紙袋綴。二十卷二十冊。小豆色無地の紙表紙。全冊外題なし(題簽のはがれた跡も認められない)。やや虫損あり。一面十一行書き。各冊冒頭に卷名の目録を丁置く。各冊の丁数は先に記した通りである。

同本は、二十冊すべて前後見返しに旧蔵者を示す墨の書き入れがある。一覧すると次の通りである(「」は原文改行)。

第一冊 ○前見返し

續貳拾冊之初／北越蒲原郡彌彦／山續角田山麓波岸／角田之郷乙始山麓／願正寺納書藏

○後見返し

此貳拾卷何方參候共早／急／越後國蒲原郡弥彦庄角田濱村／乙始山願正寺方迄御遣し／可被下付候如件

第二冊 ○前見返し

共一拾冊／卷之貳／乙始山藏

○後見返し

北海邊弥彦高山續山麓／角田之郷／願正寺物

第三冊 ○前見返し

共一拾冊／卷之三／有則堂藏

○後見返し

下越海邊山麓角田村／願正寺書

第四冊 ○前見返し

共一拾冊／卷之四／願正寺藏

○後見返し

北越海岸角田之郷／願正寺物

第五冊 ○前見返し

共一拾冊／卷之五／有則堂

○後見返し

越之后州蒲原郡角田村／乙始山藏

第六冊 ○前見返し

共一拾冊／卷之六／乙始山藏

○後見返し

北海波岸角田之郷／願正寺物

第七冊 ○前見返し

共一拾冊／卷之七／願正寺書

○後見返し

越之後州蒲原郡弥彦庄／角田村／願正寺藏

第八冊 ○前見返し

共一拾冊／卷之八／願正寺藏

○後見返し

北越海岸角田之郷／有則堂藏

第九冊 ○前見返し

共一拾冊／卷之九／有則堂藏

○後見返し

北越海邊角田之郷／乙始山藏



## 第十冊

○前見返し

共二拾冊／卷之拾／乙始山書

○後見返し

越之后州角田村乙始山／書藏

## 第十一冊

○前見返し

共二拾冊／卷之拾一／角田乙願

○後見返し

北海邊角田郷乙始山／願正寺物

## 第十二冊

○前見返し

共二拾冊／卷之拾二／乙始山藏

○後見返し

北海之邊角田之郷／願正寺藏

## 第十三冊

○前見返し

共二拾冊／卷之十三／乙始山藏

○後見返し

越後國蒲原郡角田村／願正寺藏

## 第十四冊

○前見返し

共二拾冊／卷之拾四／願正寺藏

○後見返し

北越海邊角田之郷／乙始山藏

## 第十五冊

○前見返し

共二拾冊／卷之十五／角乙願藏

○後見返し

越之后州蒲原郡／角田村

## 第十六冊

○前見返し

共二拾冊／卷之拾六／願正寺藏

○後見返し

北海岸角田村／願正寺藏

## 第十七冊

○前見返し

共二拾冊／卷之拾七／乙始山藏

○後見返し

北越蒲原角田之郷／乙始山藏

## 第十八冊

○前見返し

共二拾冊／卷之拾八／角乙願藏

○後見返し

北海岸角田之郷／願正寺藏

## 第十九冊

○前見返し

共二拾冊／卷之十九／乙始山藏

○後見返し

越之北岸角田之郷／願正寺書

## 第二十冊

○前見返し

揃而貳拾冊之終／越之后州北海邊／波岸角田之郷／

乙始山書藏

○後見返し

此本何方へ参候共早く／北越角田村願正寺迄／御遣し可被下候

以上のごとく、この本は越後国蒲原郡角田郷にある乙始山願正寺の所蔵である旨がすべての巻に記されているのである。第一冊と最終第二十冊後見返しの書き入れには、この本がどこに持ち出されても早々に願正寺まで返すようにと書かれており、相当大切にされていたことがわかる。年時を示す記事は全くないので、いつ書かれたものかは不明だが、少なくとも江戸時代のある時期において、現在の新潟県西蒲原郡巻町に属する角田村にある願正寺なる寺に所蔵されて大事に扱われていた本なのである。

願正寺は現在も巻町角田浜一一六三番地に存在する。平成十五年八月二十三日、寺の由緒を知るべく現地を訪れた。JR越後線巻駅前から女性運転手の乗務する角田山周遊登山バスにただ一人の客となり、約四十分乗車して「角田妙光寺前」で下車。願正寺は日蓮ゆかりの古刹妙光寺とは道路を挟んで反対側にあった。海岸までほんの二、三十メートルほどの海辺で、まさに「波岸」である。寺は美しい姿の山門をくぐった正面に「乙始山願正寺」の扁額を掲げた堂々たる本堂を構えた立派な建物であった。住職の乙山圓亮氏はお留守であったが、先代の奥様である住職の御母堂にお目にかかり、話を聞くことができた。寺の由緒由来については本堂に掲げられた「乙始山願正寺略史」と題する文章にわかりやすく書かれているので、それを引用する(句読点を一部変更した)。

乙始山願正寺は、その創始は不詳なるも、所蔵の記録によれば、往古は天台宗で、岩穴前の坊九坊の一寺で北蒲原郡中條村乙村乙宝寺の分寺であった。

暁雲和尚を第一世とし、建久五年九月六日往生とあるから、紀元一二〇〇年頃である。第二世は錫舉師、第三世積遥師の時、承元元年、親鸞聖人が當國国府(直江津在)に御流罪になり、全三年、蒲原御巡錫の途次、赤塚村の庵主某の許に御一泊なされた時、これより西三十余丁の地に西院の河原のあるお話をお聞きになられ、翌早朝、全庵主の御案内で岩穴にお出になられ、阿弥陀経を誦読なされたのを、お側近くにいた積遥師は、その御聲と御姿の尊さに打たれ、御教化を蒙り、立ちどころに改宗、お弟子となり、法名を教善と、更に御形見の御染筆御六字の御尊号を賜わったので、教善は尔後お供仕りたいと切に御願ひ申上げたが、聖人は、そこもとは越後の國が有縁の地なれば、我に代り衆生教化をたのむと仰せになり、左の一首を賜ったのであります。

わかる、というばかりなり昨日今日

明日は会い見ん弥陀の浄土に

斯く願正寺は祖師聖人の御旧跡であったため、こんどは第十世開蔵師の時、本願寺第八代で中興上人と仰ぐ蓮如上人の御巡錫御一泊、そしてまた御染筆の六字尊号を賜っています。当時願正寺は既に乙始山麓に移り、そしてこの地に在ること約二百八十年、その後第十七世宝了師の時、承応元年に現在地に移り、本堂は安

永六年(一七〇〇年頃)、庫裡は文化三年(一八〇〇年頃)造営されています。次、第二十二世理観師の時、明和二年三月四日(一七六三年頃)、靈夢による三尊佛が岩穴より御出現になり、当山に御安置されるに至ったのであります。而も、願正寺は千有余年の寺歴をもちながら一度も火災に遭っていないので、古い記録がそのまゝ残っている。従ってこのような話も単なる傳説や物語りではありません。明治八年、村で七十余戸も焼けた大火にも免がれ、全廿三年九月には本当の真ん中に落雷があつても焼けなかつた。

そして、明治九年には本願寺第二十一代明如上人の御巡錫をいたゞく等、これだけ御佛縁の深い寺は他に余り例がないと思われる。

明如上人より賜つたお歌(本堂前の碑銘)、

法の舟にあわずばわれもいつまでも

海にいつまで沈みはてまし

(以下略)

これによれば、本寺は鎌倉時代以来の歴史のある浄土真宗の寺で、始祖親鸞ゆかりの寺でもあり、妙光寺にまさるとも劣らない古刹なのである(本堂の前には近年建てられた親鸞上人の像がある)。山門の脇には白壁の蔵があるが、それが第三、五、八、九冊の見返し書き入れに見える「有則堂」という名の経蔵なのだといふ。しかも話によると「有則堂」の名はあの良寛の命名によるのだといふ。それが事実で、良寛が当地に程近い五合庵に在住時のことだとすれば文化年間(一八〇四〜一八)頃のことと、これら見返し書き入れもそれ

以後になされたことになる。現在「有則堂」は錠が錆び付いて開かないのだというが、中には経典や仏書がほとんどで、文学書のようなものはないはずだといふ。それにしても、確かに江戸時代後期のある時期に、この寺の経蔵には『源氏物語』の注釈書の版本が二十冊セットで収められており、貸し出されることもあったようだが、非常に大切にされていたということは、この荒波打ち寄せる北越の海岸沿いの寒村において『源氏物語』が受容されていたことの証であり、地方における文化水準の高さを示しているようにし、『源氏物語』享受史においても興味深い事象であろうと思う。

## 五 第一冊の欄外・行間書き入れ注について

さらに注目されるのは、この願正寺旧蔵『紹巴抄』の第一冊目には、ほぼ全体にわたって欄外・行間に注釈が書き込まれていることである。書き入れ注は、総説が終わって桐壺巻に入った5丁裏から箒木巻の八割以上を占める64丁表までのほぼ全丁に見られる。上部欄外を中心に、一部行間の余白にも及んでいる。書き入れは基本的に墨書だが、項目の頭に丸印と合点、終わりに句点を朱で付している。まれに丸印や合点がない項目もあり、不適切な位置に句点が置かれた例もあるので、これらの朱は後に一括して付されたものと考えられる。

紙数の都合で、次々ページ以下に桐壺巻の書き入れ注のみ翻刻した。翻刻は次のような方針によった。項目の頭の丸印は○で示した

が、合点と項目末の句点は省略した。丸印を欠く項目は頭に・を置いた。項目部分はゴシック体で記した。注釈部分は、漢字は原則として通行の字体に改め、読解の便宜のため適宜句読点を付した。上部欄外から始まる通常の注と異なる低い位置にある注については、区別するために頭に▽印を付して一字下げて記した。

桐壺巻だけで一六二項目の注が記されているが、これらを通覧してわかるのは、それらが基本的に『細流抄』の注だということである。と言うよりもほぼ完全に『細流抄』を引き写したものと云ってよい。伊井春樹氏編『源氏物語古注釈集成』『内閣文庫本細流抄』に翻刻された本文と比較するに、桐壺巻において書き入れ注に存在しない『細流抄』の注はわずかに三項目だけである(『細流抄』の項目番号9「かゝる事のおこり」、52「はたさむき」、147「くら人の少将」の三項目)。他に、項目が前後逆順になっているところが二箇所ある(71「よこさまなる」と72「かへりてはつらく」、73「うへもしかなん」と74「人の心をまけたる」。また、内閣文庫本『細流抄』では136「大蔵卿くら人」の項目の注に取り込まれている「はいしたてまつり給さま」を書き入れ注では項目として立てているが、これは本来独立した項目であるべきであり、書き入れ注の方が正しい。注釈の本文を比べても内閣文庫本『細流抄』とは小異のある箇所が少なくないので、やや異なる本を用いたものと思われるが、この書き入れをした人物は『細流抄』を見てそのすべての注を『紹巴抄』版本の欄外や行間に書き写そうとしたようである。『細流抄』は写本として十数本

が伝わっているに過ぎず、いわば稀覯本に属する古注釈書であるが、その一本が願正寺所蔵の『紹巴抄』に書き入れられる環境にあったわけでも、もしこの書き入れが願正寺において成されたのであれば、北越地方における『源氏物語』享受のレベルの高さが改めて想像されるのである。また、たまたま『細流抄』が手元にあつたから書き入れたというのではなく、『紹巴抄』が三条西公条の講釈を紹巴が聞き取ったものだと認識した上で、一般に公条の著作とされている『細流抄』の説を比較・参考のために書き入れたのであるならば、いっそう高度に研究的な姿勢で行なわれた書き入れということになるが、実際はどうだったのだろうか。なお、公条の息実枝が『細流抄』に修訂を加えて作つたと言われる『明星抄』もほぼ同内容の注釈であり、『明星抄』には版本もあるが、よく見比べると、本書の書き入れ注はやはり『細流抄』だと思われる。

ところで、書き入れ注には『細流抄』にない注も若干あって、それらは『細流抄』を写した注よりもやや小字で低い位置に記され、多く漢字片仮名混じりで記されている。手も別筆であるようだ。翻刻で▽印を付して一字下げて記した注がそれにあたる。一部朱で書かれたものもある。いまだ典拠を調べ得ていないが、何か特定の注釈書を引き写したのではなさそうである。「をよすけ」の項に「源語類聚」なる書を引いているのが注目される。「翻平安文学資料稿」第三期・第九、十巻に翻刻した源義亮の『源語類聚抄』のことかと思われたが、どうも同一書ではなさそうである(『類字源語抄』と

『統源語類字抄』に該当する記述がある)。

これら典拠不明の注記をも含めて、願正寺旧蔵の『紹巴抄』の第一冊目には『源氏物語』をかなり研究的に勉強した跡が見られるのである。そういう意味で、広島大学蔵刊本『紹巴抄』は、それ自体はさほど珍しい本ではないけれども、近世後期の北越地方における『源氏物語』享受の実態を垣間見せてくれる資料として貴重な伝本と言えるのではないかと思うのである。

書き入れが箒木巻の途中で終わっているのは、何らかの事情で中断してしまったものと思われるが、大部な書への書き入れがはじめの方だけにしかないことはよくあることである。『紹巴抄』の版本に限っても、たとえば東洋文庫蔵の古活字本には欄外書き入れが極めて多いが、それは第一冊目のみであり、同じく陽明文庫蔵本にも行間書き入れや貼紙が多いけれども賢木巻の途中まで以下には全くないのである。

今回紙数の制約上翻刻を示して検討できなかった箒木巻の書き入れについては、別の機会に稿を改めて行ないたい。

### 【桐壺巻 欄外・行間書き入れ注 翻刻】

題号の事説々多し。しかれ共唯源氏の事をしるせる故也。又は古今の序に、山した水のたえずといへるかことく、水の源をいへる也。山谷か詩に、岷江、初は濫<sup>レ</sup>觴<sup>ヲ</sup>入<sup>レ</sup>楚<sup>ニ</sup>乃無<sup>レ</sup>底と云かことく、是は女のはかなく書たれとも心あさからさる也。凡諸抄にくはしくしる

せり。仍略之。卷名は花鳥に見えたり。発端は伊勢集に、いつれの

御時にかおほみやす所と聞えける御局にとかけるにもとつけり。いつれの御時とさす事は、肝要は醍醐の御時をさして云也。高明公左

遷の事を以て須磨の事は書也。総して此物語のならひ人ひとりの事をさしつめて書とはなければ、皆故事来歴なき事をはか、さる

也。表は作物語にて莊子か寓言により、又しるす所の虚誕なき事は司馬か史記の筆法によれり。好色の人をいましめむかため、おほく

は好色淫風の事を載也。盛者必衰のことはり、則出離解脱の縁も此物語の外には有へからさる也。凡日本の国史は、三代実録孝天皇光孝天皇

仁和三年八月までしるして、其後国史みえさる歟。此物語は醍醐天皇よりしるす。彼国史につかんの心とみえたり。彼孔子の春秋も哀

公までしるせり。魯哀公は周敬王の代にあたり。其後左丘明周元非也、別人也、宋王貞定王の時代までしるして、考王夷烈王以下の事をはしるさす。

然に司馬温公か通鑑をしるす事は、夷烈王廿三年よりしるせり。是も左伝につくへき心有なり。此物語に宇多御代をしるさ、るも相かなへる也。

・更衣 便宜の御殿にさふらふしかるへき上達部などのむすめ也。○時めき給ふ 時めくは時をえたる也。時宜にあへると也。春め

く、冬めくなどおなし心也。○はしめより我はと これよりしなをたて、いへり。

○下らうの更衣たちはまして 此ましてと云一詞殊勝也。人は我身のしなくほと心もちろはあるもの也。いたらぬ下劣の嫉妬の

心は深と也。

○あつしく いろいろかち也。

▽○あつしくはわつらはしき也。あとわと五音相通か。下は畧字歟。

私、煩字、医書二煩熱ト云時ハあつきコ、ロなり(一文朱書)。

○まはゆき 人のそねみてうちもむかはさる良也。

○もろこしにもかゝる事のおこりにこそ 花鳥にはもろこしに

もといふより以上貴妃の事のやうにするさる。不可然歟。一段にみるへきなり。是は殷紂か姐己を愛し周幽王の褒姒を寵愛せしよ

り世のみたれたる事等を引て云也。さて楊貴妃のためしと書は、

此巻は長恨歌にて書故也。彼褒姒は烽火の事にて世の乱出来也。

姐己はさせる悪事見えさる也。但史記に姐己之言是従とかけり。

何事も姐己か云まゝに、に紂か悪事を行ふ心也。史記の筆誅のおもむ

き詞と見えたり。

○いとはしたなき 此更衣によそよりの人の心むけ也。

▽○はしたなきは不相応也。引 さもこそは夜半の嵐のあらからめ

あなはしたなきのまきの板戸や。

○かたしけなき御心ひとつを 御門の御気色一をたのむははかり也(朱)なり。

○ちゝ大納言は 以下更衣の族姓をいへり。

○母きたのかたなん 母北方なんいにしへのよしあるにてと句を切てよむ也。

○おやうちくし 孤独の身なれともかた〜におとらぬやうに母君のあつかひ給ふ也。

○たまのおのこみこ 源氏の君なり。玉のおのこ花鳥説尤有レ興。

○一のみこ 朱雀院なり。

○右大臣 弘徽殿の父也。

○よせおもく 寄重也。

○この御にほひには 黍稷かうはしきにあらす。明德惟馨といへるかごとく其人の威徳を匂ひといへる也。

○おほかたのやむことなき 一のみこはもとよりの御おほえはかりと也。

○はしめよりをしなへてのうへみやつかへし給へき 女御更衣

は別殿に祓候して時〜こそさふらふへきを、此人は御侍などのやうにおまへさらすめしまとはせは、かへりてかろ〜しき也。

寵愛の甚しきあまり也。

○上手めかしけれと 上すめかしきとは上臈しきと也。花鳥の説如何。

○坊にもようせすは ようせすとはあしくせはとなり。

○かしこき御かけをたのみきこえなから 是より更衣の心也。

○中〜なる物おもひ 此物語中〜と云詞いつくも奇特也。凡哥の五文字にもなか〜とをくは大事也。末いひおほせかたき故也。御寵愛甚しからすはかやうにはあるましきを、これ故に中〜なる物おもひもあると也。

○御局は桐壺也 桐壺は御殿よりはほど遠き故也。花鳥に見えたり。

○うちはし きり馬道に板をうちわたしてかよふ道也。

- あやしきわさ 花に見えたり。
- 後涼殿 涼の字らうと読よし河海にみえたり。此更衣誰ともなし。
- そのうらみまして はしめより後涼殿に住し更衣の心也。
- 此みこみつになり給ふ 三歳着袴例、河に見えたり。
- ▽○をよすけ 源語類聚ニ日本紀ヲ引テ助及ト書リ。オトナシキ事也。
- みやす所 更衣の事也。更衣たる人、御子をうみたまつりてのちの御息所に号するやうに、此物にはいつくにも見えたり。
- 五六日 いつか六日と日の字をいれて読なり。
- なくくそうしてまかてさせたまつり給 爰にて退出のやうにみえたれともいまた御いとまを申也。おくにて、わりなくおもほしなからまかてさせ給つと云處にまことの退出也。此筆法あまた所にあり。
- あるまじきはちもこそと 更衣の里にわたしたてまつらん事は遠慮して源氏の君をはと、めさせ給ふ也。
- われかのけしき あるかなきかのけしき也。正躰もなき体也。
- 手くるまの宣旨 花説可然。
- かきりとて ありめのま、なる哥也。時にのみて哀なる哥也。いかまほしきはいき度と也。
- いとかく思ふ給へましかは 花儀非歎。かねてよろつたのみし心のほかになりぬる事を思ふ詞也。きのふけふとは思はさりしと云かことし。御門の御返哥のなきは御心を深くまとはし給ふ事を見せたり。
- けふはしむへきいのり こよひよりきこえ今夜より更衣の里にて修法をもせさせむとて也。是も深くおほしめすにより退出をゆるし給也。
- まかてさせ給 ここにて退出。
- ▽○いふせき 物かなしき躰也。又おそろしき事也。
- みこはかくても 此段河誤也。花説可然。七歳以前人服忌の事醍醐御代法をたてらる、事、兩度あらたまれり。これははしめ七歳以前の人も服のいみあるへしと有し時の分にかける也。
- なに事かあらんとも 光源氏の君いときなきよし尤哀也。
- よろしき事にたに 此よろしきは中品也。なをさりのわかれさへとなり。
- おたき 今の六道是也。昔の葬所也。
- ▽○一抄、鳥部野ヲ云也ト云々。未詳之。
- ▽○所ノ者カタリ侍ルハ、六波羅ト六道トノ間ヲタギ寺アリト云へり。
- むなしき御からを 母君の心也。引哥に及へからざる也。
- ▽○はひになり もえはて、灰と成なん時にこそ人を思ひのやまむこにめ
- ひたふるに 一向になり。
- ▽○サハ思ヒツカシ サレハコソ思ヒツルコトヨト人く云也。
- 三位のくらひ みつのくらゐと読也。
- ▽○心はせ心操心 (墨で抹消)

▽○不~~レ~~ヤ~~レ~~無人~~レ~~事(墨で抹消)

▽○年中行事歌合ノ判詞、宣命ト申ハ天子ノミコトノリヲ百ノ官ニフレアメノシタニツタヘキカスル也ト云リ。

○さまあしき御もてなし 御寵愛のすくれたるによりて人のにくみをつけ給ふ也。

○なくてそとは 引哥

○御かた~~レ~~の御とのゐ 他人の御とのゐはたえてなしと也。猶なき跡迄も人のそねみ有と也。

○ゆけひの命婦 衛門の命婦也。拾遺の詞書にもあり。命婦、総しては禁中にある、内命婦と云。私の妻をも命婦と云。それをは外命婦といふ也。当時も禁中にさふらふ女房中に内侍より次に御下とてさふらふ。其中に命婦女蔵人としてあるなり。

○やみのうつゝには 引哥、夢にいくらもまさらざりけりと云たるよりは此面影はかなきとなり。引哥、歌の取やう奇特也。

○人ひとりの御かしつき 人ひとりとは更衣を云リ。

○草もたかくなり ぬしなき宿はさひしかりけりといふ哥の心なり。  
○やへむくらにも とふ人もなき宿なれとの哥宜也。春を月にとりかへて引用也。

○けにえたふましく 母君の身にてはかやうの御とふらひにあつかる事ははつかしきと也。

○まいりては 命婦の詞也。

○内侍のすけ 是よりさきに内侍のすけを御使につかはさるゝ事

あるへし。

○しはしはゆめかと 是より勅定宣を命婦のつたふる也。

○めも見え侍らぬに 母君の詞也。

○ほとはすこし 是より勅書の詞也。

○みやきのゝ 宮中の心也。花。

○松のおもはむ 引哥。人にしられんもはつかしと也。

○ゆゝしき 爰にてはいま~~レ~~しき心也。所々用かへたる詞也。

○宮は御とのこもり 宮とは源氏也。

▽○長恨歌伝ニ玉妃方寝。オホトノゴモリトヨマセタリ。

○みたてまつりて 命婦の詞也。うちをみまいらせて有さま奏せんとする物をと也。

○くれまどふ 母君の詞也。子を思ふ道をいへり。

○としころうれしく 更衣在世の時はおもたゝしき事にこそ御消息有しに、唯今思かけさる事の御使とかなしきと也。

○かへりてはつらく 寵の甚しきもかへりてはつらきとなり。是も心のやみと也。

○よこさまなる 横死也。あまりに寵愛甚しき故に人のそねみなのつのもりてうせぬると思ひなさるゝ也。

○人のこゝろをまけたる 御心ならぬ事もありしと也。

○うへもしかなん 命婦の詞也。

○月はいりかたの空 まへに夕付夜のおかしきほとにいたしたてさせ給と云にかけてみるへし。夜のふけゆきたる景気余情たくひ



- なし。
- 虫のこゑく 哀を催也。
- すゝ虫の 命婦の哥也。
- えものりやらす 前に門引いるゝよりとかきてこゝにえものりやらすとかけり。悉皆車の事を車とはいはて余情にてかけり。
- いとゝしく 母君。
- ▽母の<sup>ん</sup>ま<sup>ん</sup>ま<sup>ん</sup>ま<sup>ん</sup>りし東衣ノ歌(墨で抹消)○母ノ服ニテ里ニ侍ル比醍醐御門ヨリ無常ノ御文給ケル御返事ニ五月雨ノ哥。
- かこともきこえ かことは、かこつ也。又所によりかはりめある詞也。
- 御くしあけのてうと さしくしなどの類なるへし。
- すかくと はやくと也。速也。
- ▽○おほとのもらせ給 主上いまた御寝ならざると也。尤哀なるへし。命婦帰参を待たまふ故也。
- つほせんさい 此巻の一名ともいへり。
- 長恨哥の御ゑ 花鳥にしるせり。貫之哥事不見云々。然共凡此物語に書事則証拠なるへし。栄花物語伊周公左遷の所にも昔の長恨哥の物語もかやうなる事にやと悲しくおほしめさるゝ事かきりなしと云々。
- まくらこと つねの事也。
- いともかしこきは 母君の文詞。
- あらし風 更衣のなくなりし<sup>つ</sup>云。
- みたりかはしき 両儀有り。第二三句御門の御うへを云に似たり。仍憚へきと云心也。又義、此種のみたり心にかきかさまなともみたりかはしきとなり。草子地評して云也。
- いとかうしも 御門の御心也。
- ・かくても月日は かくても経ぬる世にこそありけれの心也。
- 故大納言のゆいこん 大納言のこゝろさしを母君のきこえによりて仰さるゝ也。
- かくてもをのつからわか宮など 母君をなくさめ給ふ御詞也。
- しるしのかんさしならましかは 花鳥。
- たつね行 幻術の方士もかなと也。
- からめいたるよそひはうるはしう うるはしうは実なる也。
- なつかしうらうたけなりし 貴妃にはたとへも有し也。此更衣はたとへん物なきと也。
- 弘徽殿には 遊なとし給也。かくまでの御なげきにてあるへきとも思給はぬと也。
- 月もいりぬ 此詞殊勝の由古来所称也。前に夕月とかき月はいりかたの空とかきて月もいりぬとかけり。月落長安半夜鐘の句にもおとらすやと云々。
- あくるもしらす<sup>て</sup> 引哥、長哥をよめる哥也。
- 猶あさまつりことは 長恨哥には貴妃か寵によりて也。爰は更衣の事の御なげきにおこたらせ給ふ也。猶の字殊勝也。
- 大床子 朝餉は女房の陪膳、大床子のは殿上人の陪膳也。いつ

れをも御覽しもいれさるさま也。

○この御事にふれたる事をは 御寵愛の甚によりて此更衣の事にふれてはすこしは道理をまけたる事もありしとは、後涼殿の更衣をよそにうつし給などのたくひなるへし。

○人のみかとのためし 河海玄宗と有。玄宗は祿山か乱の後則位をさりて肅宗につき給しかは、位をもやさり給はんすらんの心也。

○月日へてわか宮まいり給ひぬ 源氏君也。

○坊さたまり給ふ 朱雀院の御事也。醍醐御代には東宮文彦太子保明薨ノ後其子慶頼王立坊又早世。其後朱雀院立坊也。

○女御も御心おちる給ぬ 弘徽殿の御心安堵せし也。

○かの御おは北の方 更衣の母君。源氏の君祖母なり。

○このたひはおほしりて 源氏君更衣にわかれ給時は何のわきまへもなかりしを、此度は思ひしりて愁傷有也。

○女みこたちふた所 朱雀院の御一腹也。

○宇多の御門の御いましめ 河、花、等にみえたり。

○鴻臚館 河花に見えたり。今のよつ塚といふ所の辺也。

○右大弁の子 うつほ物語にも相人の右大弁の子としてあふ事あり。

○国のおやとなりて又其御さうたかうへし 此一段花鳥義いか、言ははしめより国のおやとなりてあらはあしかるへし、天下をたすくるかたにてあらはみたれうれふるかたたかひてよかるへし。

○弁もいとさえかしこぎ さえはさ文字清へきよし一條禪閣御説

と云々。然共さ文字古本濁て声をさす也。可然哉。其故は神樂のざいのをのこともさ文字濁也。

○いみしきをくり物 此進物、梅かえ巻に沙汰。

○やまとさう 和国の相人もかやうに申と也。

○無品親王の外さく 花。

○いよくみちくのさえを 天下のたすけなとならせ給は、才学なくてはとて也。

○すくよう 宿曜師。人の運命などをかんかふる者也。

○先帝 系図になし。

○三代の宮つかへ 河海、光孝、宇多、醍醐かと有。然ともさして三代にてなくとも只久しくといはんため歟。

○御かたち人にて かたちよき人と也。

○ゆゝしうと いまゝしき也。

○きさきもうせ給ぬ 藤壺の母后也。

○兵部卿の御子 紫上父也。後に式部卿。

・これは人のきはまさりて 桐壺の更衣は族姓さしもなきによりて人もそねみしに、是は族姓人からそねみ云へきかたなしと也。

・おほしまさるゝとはなけれと おもしろきかささま也。

○うちおとなび給へる 女御たちの中に藤壺はわかくおはしますと也。

○はゝみやす所は 源氏の君更衣の面影はおほえ給はねとも、今内侍のすけのかたり給ふにつけてなつかしく思ひ給也。

- うへもかきりなき 主上の御心には源をも藤壺をもいつれも大切に思ひ給ふ故也。
- こきてんの女御、又この宮とも 更衣の後は源氏をは思ゆるし給ひしを、此藤壺と御中へたて給はぬより、たちかへり源をにくみ給と也。
- 名たかうおはする 弘徽殿の宮たちの事をいふ。
- かゝやく日の宮 花。
- おはします殿 清涼殿也。花。
- 大蔵卿くら人 花。
- はいしたてまり給さま 春宮の御元服は南殿にて堂上にて拝あり。是は堂下にてある故に皆涙をおとすといふ義あり。され共只源氏の容儀進退を感じる心可然歟。
- ・さふらひに 殿上也。
- おとゝけしきはみ給 今ひきいれの大員むことり給へき也。さて我恋し人賞し申さるゝ事也。
- いとぎなき いとけなきといふ本有。それをもいとぎとよむへし。
- 御心はへありて 葵上の事を含たる仰也。
- むすひつる 紫は惣して女を云。又は今は元服なれはいふ也。哥の心は源氏君の心たにたかはすはと也。
- みはしのもとにみこたち 元服の禄賜也。
- おりひつ おりうつと読也。おりにいれたる也。
- こ物 とんしき 河海。

- ゆゝしううつくしと 此ゆゝしうはゆへくしき心也。
- 女君はすこしすくし 葵上は源氏に四の兄也。此年のましたる事故始終葵上は心をかせ給ふと也。
- おほなく 念比に也。
- さとのとは 更衣の里也。後に二条院と云也。
- おもふやうならん人を 一儀大方思ふやうなる人と也。又藤壺の心あり。
- ひかる君と 源氏の名の事をかきあらはせり。西三条右大臣源光と云は仁明天皇御子、才人也。
- となん 紫式部我かきたる事を人にしらせしとなり。何巻にも此心あり。

〔付記〕本稿は、平成15年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究C(Ⅰ)『源氏物語』古注釈資料のデータベース化に関する研究〔研究代表者・妹尾好信〕の一環をなすものである。

## A bibliographic study of *Genjimonogatari-Johasho*: with special reference to the collection of Hiroshima University Library

Yoshinobu SENO

So-called *Johasho* is an early annotated edition of *Genjimonogatari*, which is a verbatim note of *Sanjonishi Kineda*'s lecture put down by *Satomura Joha*, is commonly a twenty-volume book in twenty parts. While handed down in manuscript, the book was published in wood-block letters during the *Kanei* era in the early *Edo* period, later reprinted from a wood block, and spread among people.

Hiroshima University Library has a collection of *Johasho* in twenty parts. On the inside cover of every part, we find the name of the former owner. The first part of the book has marginal notes or interlineations in almost all the pages.

In this article, we surveyed the manuscripts and the editions of *Johasyo*, and then reported that the *Ganshoji* temple, the old owner of the book, exists in *Maki-machi*, *Niigata* prefecture and that the annotations found in the book mostly coincide with those in *Sairyusho*.